

プレ戦略イニシアティブ「日本語日本文化発信力強化研究拠点形成」
「祈り」プロジェクト 第二回ワークショップ報告書

開催日時：2013年12月26日（木）

会 場：共同利用棟 A201

参加人数：21名(教員14名、大学院生等7名)

「祈り」プロジェクト概要説明

矢澤真人教授（筑波大学人文社会系・日本語学）より、プレ戦略イニシアティブ「日本語日本文化発信力強化研究拠点形成」における「祈り」プロジェクトの概要が紹介された。その内容は、以下の通りである。

本プロジェクトの目的は、1)「祈り」を通して「人」と「文化」を考えること、2)日本語・日本文化における「祈り」を他文化との交流の視点から考えること、3) 3.11以降の日本語日本文化発信キーワード「きずな」「ゆい」「おもてなし」の中で、「祈り」を捉え直すことの三点にある。

本プロジェクトのワークショップは、宗教学、文学、言語学、歴史学といったそれぞれの専門分野の立場から、「祈り」をどのように捉えていくのかを考察するものである。その中で、「祈り」を巡って、それぞれの研究者がどのように絡んでいくのか、共同研究の方向性を見出すことが本プロジェクトの課題のひとつである。

上述した概要説明の後、今回のワークショップの発表者が紹介された。



矢澤教授による趣旨説明



谷口教授による発表



服部助教による発表



柴田准教授による発表

神への祈り・仏への願い―『日本三代実録』から―

谷口孝介（筑波大学人文社会系・日本古代文学）

谷口孝介教授の発表では、『日本三代実録』を対象として、「他への詠え」としてのイハヒ、「自らの希望」としてのチカヒ、神仏へ働きかける文体、イノリとチカヒとの混交、「御霊会」を読むなどの話題が提供された。その概要は、次の通りである。

・「他への詠え」としてのイハヒ

『万葉集』から「竹玉を しじに貫き垂れ 齋瓮に 木綿取り垂でて 〈忌日管〉 我が思ふ我子 ま幸くありこそ」という、息子を心配した母の歌などが紹介された。「齋ふ」はけがれを嫌って忌みつつしむことであり、そのための儀礼を行うのに用いる酒の容器が「齋瓮」であるという。この歌のように、何かを禁欲したり捧げたりして、神仏へ行動をおこしてほしいと詠える例が見られる。

・「自らの希望」としてのチカヒ

「法隆寺金堂薬師仏造像銘」に見られる「誓願賜（＝誓願^{こひちか}ひ賜^{たま}ひしく）」、「法隆寺金堂釈迦仏造像銘」にある「共相発願（＝共に相願^{とも あいちかひ}を^{おこ}ししく）」などを通して、「自らの希望」としてのチカヒの例が示された。

・神仏へ働きかける文体

神霊を弔う祭りやこれに祈禱する時に神前で誦する文章である「祭文」、仏事を行う時に、施主の祈願の意を述べた文章である「願文」を中心に神仏へ働きかける文体が紹介された。その上で、「願文」について、日本では、奈良時代から作られ、以降時代が下るとともに膨大な数の作品が制作されているのに対して、唐代の『白氏文集』など詩文集には「願文」が見られないことが指摘され、「願文」はどのような由来なのか不明な点が多いなどの問題提起と議論が行われた。

・イノリとチカヒとの混交

『新撰字鏡』の「知加不又己不又伊乃留」という訓や、『続日本後紀』に見られる、「誓願^{こひちか}と「^{こひのみまを}禱申^を」を対句的に用いる表現、「^{かざりのみいほひまを}飾祈鎮申」のような同語反復の表現を示し、イノリとチカヒとの混交が見られることが指摘された。

・「御霊会」を読む

『三代実録』に記載される「御霊会」について、三段に分かれている記事それぞれの考察が為された。第一段では、貞観五（863）年五月二十日、神泉苑で行われた儀式の様子が記されている。第二段は、第一段の記事の注釈的箇所である。これらに対応させて読むことで、貞観五年の御霊会の重層的な意味と、為政者の目指していたものが透視できる。第三段は、第一段の日時に戻ってこの時点で御霊会が催された意図を述べ、この記事の歴史的意味を確認しようとするものである。

質疑応答では、道教との関係、『三代実録』以降の時代への影響、資料「法隆寺金堂薬師仏造像銘」が、日本語文とされた理由などが議論された。

服部訓和（日本大学商学部・日本近代文学）

服部訓和助教の発表は、「原発事故のあと現代日本において『祈り』はどのように可能なのか」という問題を、大江健三郎とその作品を通して考察するものであるとともに、エドワード・W・サイードや「新批評」などにも言及することで、大江の営みと人文学の関連に迫ろうとするものであった。報告では、主として、以下のような話題が取り上げられた。

・原発事故と祈り

近年の小説『晩年 様式集』^{イン・レイト・スタイル}（『群像』2012・1～2013・8→2013・10、講談社）や、ルポルタージュ『ヒロシマ・ノート』（『世界』1963・10、1964・10～1965・3→1965・6、岩波書店）、講演「信仰を持たない者の祈り」（1987・10、於東京女子大学→『人生の習慣』^{ヘビット}1992・9、岩波書店）、小説『大いなる日に一燃えあがる緑の木・第三部』（1995・3、新潮社）などを通して、大江健三郎における「核」と「祈り」の関係が示された。その上で、「私的」なものとして「公的」なものがあるかた、「災後」という言葉に象徴される新しい時代の局面など、「3・11」後の問題点が整理された。このような状況の中で、「読み返されるべき」一冊として言及される、大江健三郎の小説『人生の親戚』（『新潮』1989・1、「文学界」1989・3→1989・4、新潮社）が提示された。

・『人生の親戚』／「信仰を持たない者の祈り」

小説『人生の親戚』では、度重なる不幸に苦悶しつつも自らの生き方を選択した女性「まり恵さん」の生涯が、作家である「僕」の視点から描かれている。彼女は知恵遅れの長男と事故で下半身不随となった次男を自殺によって同時に喪うという悲劇を体験する。報告の中では、小説で、〈アレ〉と表現されるこの悲劇と「集会所」での「瞑想」、〈アレ〉の語り方などについての考察が為された。さらに、「信仰を持たない者の祈り」の記述によりながら、「自分にはわからない」「問いかけ」を行い、「超越的なもの」を求めていく「祈り」のありようが示された。

・人間主義と人文学

大江の小説『晩年 様式集』^{イン・レイト・スタイル}が前提としている、エドワード・W・サイード（大橋洋一訳）『晩年のスタイル』（2007・9、岩波書店）、（富山太佳夫訳）『人文学の批評の使命—デモクラシーのために』（2006・8、岩波書店）などを参照しながら、「異邦者として故郷喪失を蒙った」、「文献学のディアスポラ的性格」が示された。その上で、大江の人間主義とアメリカ合衆国の人文学（「新批評」）との関連性が考察された。

質疑応答では、大江の作品における「祈り」が、近代以降のキリスト教に基づくことをどのように捉えるのかという問題、「ユダヤ的（性）」という概念自体の検討の必要性などが議論された。

祈りと死語—シュメル時代後のメソポタミアにおけるシュメル語の祈り—

柴田大輔准教授（筑波大学人文社会系・アッシリア学）

柴田大輔准教授の発表は、古代メソポタミアにおける楔形文字資料に見られる「祈り」について、図像・言語・文体などの観点から分析するものであった。

・「祈り」の図像

前三千年紀から前一千年紀まで、「手を挙げるジェスチャー」の図像が様々な資料に登場する。俗説として、人が神に対して行う祈りの仕草であると考えられる向きもある。しかし実際には、人から神への祈りだけでなく、神から人への祝福、人と人との挨拶という場面において、両手ないし片手を挙げる図像が多々ある。このことは、「手を挙げる」ことがコミュニケーションの一手段であったことを示唆している。

・「祈り」という語の意味

今回対象とする楔形文字資料はシュメル語とアッカド語で書かれたものである。「祈り」の行為を表す動詞として最も良く使われるのは、アッカド語の *karābu(m)* であるが、これは「祈り」のみならず「祝福、挨拶」などを包括するものである。たとえば、神から人に対しては「祝福」として、人から人へは「挨拶」として、人から神へは「祈り」として使うことができる。

・「祈り」の文言の構成

楔形文字資料の中には、様々な儀礼的脈絡で唱えられた「祈り」の文言を書写した粘土板があり、便宜的に「祈祷」「賛歌」「呪文」「哀歌」などとジャンル分けされている。祈りの文言のほとんどは定型表現であり、(1) 神（々）への呼びかけと賛美、(2) 苦しい現状の描写、(3) 嘆願、(4) 神（々）の賛美、という構成を持つ。定型的でない、その場で考えるような「祈り」もあったと思われるが、そのようなものは書写・保存されにくい。

「祈り」の文言は、特定の目的を叶えるための儀礼的脈絡の中で唱えられる。それは、夜泣きする赤子を宥める祈りのように、おまじないのような使われ方もする。

・「祈り」の文体

「祈り」の中で、呼びかけの対象である神（々）は基本的に二人称が使われる。一方で、王や主人など目上の人間に対しては、二人称と三人称が混在する。このように、神への呼びかけと人への呼びかけは、用いられる人称に明確な違いがある。

また、「祈り」の中ではいわゆる過去形が用いられることが多いが、これは執行される前提としての未来と対応していると考えられる。

・「祈り」の伝承

シュメル語は前四千年紀からメソポタミア南部で用いられ、前2,000年頃に日常語としては使われなくなったが、書き言葉として書記教育や知的伝統の中で紀元前後まで継承された。一方、アッカド語は前三千年紀初頭から紀元後一千年紀初頭まで用いられ、メソポタミアにおけるバイリンガリズムを形作っていた。

シュメル語本文にアッカド語訳（正確には文語バビロニア語訳）が付記された祈祷文は、追加・部分変更されつつ二千年以上伝承された。このような場合、アッカド語訳は基本的に逐語訳であり、他のアッカド語祈祷文に比べ単純になる傾向がある。また、逐語訳とは言え、シュメル語本文に対して多様な解釈が施される場合もある。

質疑応答では、まずシュメル語でも「祝」の祈りが「呪」の祈りに用いられうることが確認された。補足として、スロベニア語では語源的に「祈る」が「願う」に、「聞く」が「祝う」に、「誓う」が「呪う」になったことが示され、どのような意味パラダイムをなしているかの重要性が指摘された。

また、アッカド語の「祈り」の定型における「神（々）への賛美」の部分が、日本語には少ないことが指摘された。一方で、韻文性を持つ祈祷文は儀礼や芸能とは切り離せないものであり、ひいては国家的意識と関連するのではないか、という論点が提示され、この点については日本も同じであるという指摘がなされた。



質疑応答の様子①



質疑応答の様子②



質疑応答の様子③



会場の様子